

アルケイアー記録・情報・歴史・歴史―
第九号 二〇一五年三月 四一―六三頁
南山アーカイブズ

私学における大学史編纂と大学アーカイブズ

―学習院での経験から―

桑尾 光太郎

学習院アーカイブズ

Editing of University History and University Archives
in the Private School: My Experience in Gakushuin

Gakushuin Archives

KUWAO Kotaro

Archeia: Documents, Information and History
No.9 March, 2015 pp.41-63
Nanzan Archives

はじめに

- 一 学習院大学五十年史事業とアーカイブズ構想の萌芽
- 二 「大学」史編纂と「学校法人」の資料室
- 三 編纂実務と大学アーカイブズ
- 四 学習院アーカイブズの開設
- 五 「機関アーカイブズ」への取り組み
- 六 各学校での年史編纂・資料整理―事業の拡がりや深まり―
おわりに ―「人に優しいアーカイブズ」をめざして―

私学における大学史編纂と大学アーカイブズ

―学習院での経験から―

桑尾 光太郎

はじめに

本稿は、「学校法人設置のアーカイブズの活動の現状（法人・系列校からの文書移管、系列校との連携活動など）と今後の課題について」執筆してほしいとの依頼に基づくものである。原稿が書けずに苦しんでいるとき、テレビや新聞で阪神淡路大震災から二〇年を迎えたことが盛んに報じられていた。テレビ映像を眺めながら、筆者自身も大学史編纂や大学アーカイブズの仕事に就いて二〇年が経ったことに改めて思い到った。二〇年も働いているには貧弱な成果しか出すことができず、自らの無能と怠慢に恥じるばかりだが、これまでどのように大学史編纂と大学アーカイブズの仕事に携わり、どのような条件の下で何を企図し、試行錯誤を続けてきたかをこの機会に顧みたいと思う。

ここ数年、「大学アーカイブズ」を題材にした論考がよく見られるようになった。それらは永井英治も指摘する

ように、国立大学におけるアーカイブズや文書管理・保存をテーマとしたものが中心になっている。¹⁾国立大学が公文書管理法への対応という課題に取り組むようになったこともあるが、国立大学ではアーカイブズの実務担当者の多くが教員身分の研究職として採用されており、研究を行いその成果を発表するのが仕事なのだから、大学アーカイブズの業務を担当する研究職が増えるにつれて論考も増加するのは当然である。他方で私立大学（学校法人）の歴史を示す史資料を保管・公開・活用するアーカイブズもしくはそれに類似する部署は、国立大学のそれより格段に数は多く業務の内容もさまざまである。そしてその担当者は、筆者を含めて事務職員である場合が多く、アーカイブズに関する研究の発信は国立大学に比べると今のところ少ない。²⁾本稿は筆者が経験した私立大学における大学史編纂と大学アーカイブズの業務の実態と問題点を、解決の緒も思いつかないまま紹介する程度に終わるが、筆者と同様に私学の編纂室やアーカイブズで日々業務にあたっている方々に、少しでも「そうそう」と頷いてもらえるようなことがあれば幸甚である。

一 学習院大学五十年史事業とアーカイブズ構想の萌芽

筆者が大学史および大学の史資料に携わる仕事に就いたのは、一九九四（平成六）年のことで、それまでは大学院で日本近代史を専攻しながら、大学の歴史に対する知識や興味は全くもっていないかった。大学の組織や運営に対する関心も皆無で「学校法人」と「大学」との違いも知らなかった。同年、学習院大学五十年史編纂の企画が立ち上がり、不勉強で就職のあてが無い分、雑用を厭わない院生であった筆者が担当に選ばれたものと思われる。筆者は学習院大学史料館の助手（任期付き）に採用され、編纂の実務を行うこととなった。

学習院大学史料館は歴史資料の蒐集保管・調査研究ならびに公開を目的として、一九七五（昭和五〇）年に設置された大学附置研究所である。近世の大家家文書や村方文書、作家の辻邦生資料のような近現代の個人資料、モノ資料などの歴史資料を所蔵し、整理のうえ目録を作成して公開をはかり、研究や展示・生涯学習活動・博物館実習などを業務としてきたが、学習院史関係の文書資料を収集の対象とすることはなかった。史料館開設時の大学長は日本近世史の研究者として知られる児玉幸多（一九〇九―二〇〇七）で、児玉は学習院史編纂について豊富な経験を有し、当時進行していた学習院百年史の編纂委員会委員長も務めていた。児玉は学習院百年史の事業と大学史料館の事業とを、明確に区分していたと思われる。大学史料館の英語表記は“Gakushuin University Archives”とされていたが、それは学習院という組織の文書を扱うという意味ではなく、古文書や歴史資料一般を扱う“Archives”という意味での表記であった。

一九九四年の時点で史料館が編纂実務を引き受けるに至った理由は、大学五十年史編纂を通して関連の文書や資料を収集整理することによって、史料館に大学アーカイブズとしての機能を持たせようとするねらいからであった。前任の史料館助手で筆者とは入れ違いで転任した保坂裕興（現学習院大学大学院アーカイブズ学専攻教授）は、記録管理と大学史編纂との関係について、当時次のように見通しを記している。

第一に、記録管理については、現用段階↓半現用段階↓歴史資料段階という、記録のライフサイクルをつくる必要があるであろう（略）第二に大学史編纂は、このライフサイクルをできる限り実現しながら、歴史資料を使って編纂・執筆・刊行することが望まれる（略）第三に、以上のように見てくるならば、記録管理と大学史編纂は、共通の目的のもとに位置づけることができよう。つまり、一つは、自らの活動記録を自組織にフィードバックし、中・

長期的省察と展望に資すること、もう一つは、大学と社会の呼応関係の中にフィードバックし、社会的使命と存在意義を証明・開示することである。⁴⁾

保坂は「アーカイブズ」という用語を使用していないが、大学史編纂を通じて学内に記録のライフサイクルを形成し、歴史資料（非現用となつて歴史的価値をもつ記録）を史料館に移管して公開・利用に供することにより、大学の社会的使命を担つていこうとする、史料館に学習院大学アーカイブズとしての機能を付加しようという構想を既に描いていたのである。しかしながら編纂実務を引き受けた以上、眼前の課題として向き合わなければならないのは大学史の執筆・編集と期限までの刊行であり、筆者が着任した頃の史料館はそうした実務に関するノウハウは皆無であった。史料館の現場スタッフの間でも、編纂実務を引き受けることへの合意形成はできておらず、周囲の同僚は大学史の作業の始まりに決して良い顔をしなかった。物品費やアルバイト予算は認められていたものの、史資料を持ち込んで整理作業を行う部屋さえ用意されておらず、筆者は自分のデスクを置く空間を確保すべく騒ぎ立てるところから始めなければならなかった。

二 「大学」史編纂と「学校法人」の資料室

一九九四年秋には作業場兼資料置き場の小さな編纂室があてがわれ、パソコンやコピー機も用意されてようやく大学五十年史の実務がスタートした。事務倉庫から未整理の古い文書の山が運び込まれ、その整理と仮目録の作成から作業が始まったのだが、敗戦後間もなく学習院が宮内省の管轄から離れ、私立学校として独立しようとした時



写真① 大学入試ポスター

期の文書や、一九四九（昭和二四）年の大学開設当初の教務関係文書などが多く含まれていた。劣化が進みぼろなつたわら半紙を注意深く開きながら、文書を手に取った順に目録を採ってパソコンに入力し中性紙封筒に収納したのだが、単調な作業を続けていくうち「大学の歴史をどう表現するか」についてのアイデアが少しずつ浮かんでくるようになり、整理作業に熱中していった。資料の整理と目録作成はいうまでもなくアーカイブズ構築の基盤作りであるが、その経験は年史編纂を行うにあたって、筆者にとつて欠くことのできない出発点となつた。

整理作業を始めたばかりの頃、教務関係の簿冊に挟み込まれていた古いポスターを発見した【写真①】。一九五七（昭和三二）年度大学入試用のポスターで、「学習院は誰でも入学できます。身分など全然考慮しません」「学習院はそう費用のかかる学校ではありません」といった文言からは、志願者集めに苦労していた頃の大学の姿が想起され、展示等で紹介しても高い関心を集めている。入試用の古いポスターで残されていたのはこの一点のみで、決して意識して保存されていたものではなく、残されていたのは偶然であろう。このポスターから、日々の業務で作成される平凡な文書や印刷物が、年月によって価値を付加され貴重な歴史

資料となるのであり、そうした資料を見つけ出して保存・継承し、将来に伝えることがアーキビストの使命であることを教えられた。

近年は「記念史編纂とアーカイブズ構築とは別物である」として、両者を分ける考え方が主流なのかもしれない。菅真城は、「事実、「大学史」編纂を業務としている「大学アーカイブズ」も存在する。しかしながら、筆者は「大学史」と「大学アーカイブズ」は似て非なるものではないかという印象を持っている」と記している⁽⁵⁾。菅が取り組んだ大阪大学アーカイブズの起ち上げは、大阪大学の年史編纂事業とは関連なく進められたもので「ポスト年史編纂ではない大学アーカイブズの設立」という菅の主張も当然であろう。大学におけるアーカイブズ構築へのアプローチはいろいろな手段があるのであり、筆者も大学史の経験が大学アーカイブズの設立に必須であるとは考えていない。要はアーカイブズを構築するにあたって、その組織の条件で利用しやすい方法を選択していけば良いのである。大学アーカイブズは多様な形態・特徴を持つことがのぞましいという寺崎昌男の見解に筆者も同意する⁽⁶⁾。筆者自身にとって、大学史編纂における経験がアーカイブズを考える上でのスプリングボードになったことは確かであり、大学史と大学アーカイブズは別物であるが、そう厳密に区別するほどでもないというのが私見である。

大学五十年史編纂室の活動が始まった頃、同じ学習院内にこれとは別に「学習院院史資料室」が、法人総務部総務課の一係として存在していた。一九七〇年代から八〇年代にかけて『学習院百年史』が編纂された際に収集された文書や写真をはじめ、文献類・マイクロ紙焼き・座談会原稿・年表及び資料目録のカード、明治末に学習院長をつとめた乃木希典の遺品資料ほかが保存され、百年史事業終了後も職員を一名配置し、外部からの問い合わせや資料の受け入れなどに対応していた。しかし積極的に事業を展開するというわけではなく、周囲も資料の散逸を防ぐ程度の存在意義しか感じていなかったようだ。筆者も大学五十年史に携わるまで、院史資料室という部署があるこ

とを知らなかった。

学校法人学習院 (The Gakushuin School Corporation) は、幼稚園、初等科、中等科、高等科、女子中・高等科、大学、女子大学の七つの学校によって構成される。学習院の創立は一八七七 (明治一〇) 年で、創立時は現在の初等教育と中等教育に該当する課程がおかれたため、初等科・中等科・高等科が創立当初から続く学校と認識されている。一八八五 (明治一八) 年には、女子中・高等科の前身となる華族女学校が開設され、学習院女学部・女子学習院と名称を変えながら、男子校である学習院とは別の学校として女子教育を行っていた。戦後の一九四七 (昭和二二) 年、それまで官立学校であった学習院と女子学習院は合併して私立学校として再出発し、一九四九 (昭和二四) 年に新制学習院大学が、翌一九五〇年に学習院大学短期大学部 (現学習院女子大学) が開学した。

『学習院百年史』が対象としたのは法人および七校全体にわたる明治以来の歴史であり、院史資料室は学習院全体の資料を守備範囲としていた。筆者が担当した『学習院大学五十年史』は、そのうちの戦後新制大学の部分を対象とするものであった。『学習院百年史』でも当然大学の開学から一九七〇年代までの動向が叙述され、院史資料室には大学開設認可申請書をはじめとする関連資料が多く保管されていた。大学を設置する意思決定は法人が行うのだから当然のことであり、大学の歴史を叙述する際に法人の動向を無視して書けるわけがない。学習院の場合、そもそも編纂にあたって「法人の歴史と資料」と「大学の歴史と資料」とを区分することが難しく、また法人本部和大学は同じ目白キャンパスに存在しているのだから、歴史資料を法人資料と大学資料に分けて保存することにさほど意味はなかった。今思えば、大学五十年史を開始する際になぜ院史資料室を拠点とせず、年史編纂の経験をもたず関連資料も所蔵していない大学史料館が担当することになったのか不思議に感じるが、ともあれ筆者が史料館に着任した当初、史料館と院史資料室は全く没交渉であった。それだけ法人 (事務組織) と教学 (教育研究組織)

の間に、傍目には理解しにくい厚い壁が存在したということであろうが、その壁を突き崩さないことには、まともな年史編纂も将来アーカイブズにつながる資料の調査・収集・整理もままならないことは、頭の鈍い筆者でもすぐに理解できた。

筆者が院史資料室の担当職員に大学五十年史への協力を求めた際、いきなり「これほど割に合わない仕事はないから、自分の研究を優先して早く辞めた方が良い」と言われ面食らったことを記憶している。とはいえ院史資料室に保管されていた大学関係の文書・印刷物や写真は、その職員の配慮によって速やかに大学五十年史編纂室に貸し出され、院史資料室が保管する旧制学習院時代の資料も自由に見ることができるようになった。院史資料室の職員は大学五十年史にさほどかわることなく一九九六（平成八）年に退職したが、『学習院百年史』という大事業にあたって一貫して実務の中心にいただけあって、資料の整理や保管は詳細かつ正確に行っており、腕の良いアーキビストであったことは疑いない。百年史編纂時に作成された資料目録や教員履歴・年表などのカード類は、現在でも頻繁に利用しており学習院アーカイブズの土台となっている⁷。

三 編纂実務と大学アーカイブズ

『学習院大学五十年史』とその前に行われた『学習院百年史』との大きな違いは、対象とする学校の範囲と叙述の対象とする時代であった。『百年史』は明治から一九七〇年代までを対象としていたのに比べて、大学五十年史は開学五十周年を迎えた一九九九（平成一一）年までの動向を叙述しなければならなかった。参照する資料も直近に作成されたものを必要とし、作成されて年月が経ち、「非現用」となった資料だけでは対応できないのである。

そのため筆者は教務課・学生課・総務課・施設課等々といった部署の事務室や倉庫を回って、どの部署にどのような事務文書や資料があるかを、現用・非現用にかかわらず―そもそも現用・非現用の区別さえわからなかった―確認していった。そして倉庫や書棚に収蔵されているファイルの表題や作成時期をメモして簡単なリストを作り、そのリストから執筆に必要な資料を捜しながら、各部署と折衝して閲覧・借用などを行った。その作業を行って、学内における文書管理の実態にふれてさまざまな問題点があることを実感した。一例を挙げると、規程上「永久保存」と定められていても実際には揃っていない文書が多く見受けられ、大学案内や学園祭のパンフレットなど、編纂では欠かすことのできない印刷物のバックナンバーも不揃いの状態であった。重要会議資料であっても、保存環境が悪くわら半紙がぼろぼろに劣化しているものも多かった。こうした問題は、学習院のみならず多くの大学が直面しているはずである。

国立大学では二〇〇〇（平成一二）年に京都大学文書館が発足するなど、情報公開法への対応を契機として行政文書（二〇〇四年以降は法人文書）の管理が整備され、非現用文書の移管先としての大学アーカイブズが生まれ始めていた。他方で私立大学は情報公開法に従って作成文書を公開する義務がなく、現在でも公文書管理法に従って文書管理を実施する対象ではない。しかし倉庫を回って文書リストを作成した経験からすれば、学習院のような組織でも文書を管理するシステム（と言ってしまおうと大仰だが、まずはどこに何があるかを明確にし、各文書ファイルの保存年限を設定する程度のことである）と、非現用文書―保存年限を過ぎて業務上では現課で保管する必要のなくなった文書の中で歴史的な重要性が認められるもの―を選別し、アーカイブズのような別組織で保存利用することができれば、年史編纂や歴史研究のみならず業務の効率化や広報戦略等にも十分活用できると確信するのに、さほど時間はかからなかった。

大学五十年史編纂事業は、図録『学習院大学の五十年』（一九九九年）と『学習院大学五十年史』上巻（二〇〇〇年）・下巻（二〇〇一年）を刊行して二〇〇一（平成一三）年一〇月に終了した。筆者および編纂実務にあたったスタッフの任期も終了して同年度に学習院を退職し、収集・整理した史資料や作成したデータ等は、院史資料室に移管されることとなった。事業終了に先立ち、大学五十年史で収集・整理された資料と院史資料室所蔵資料とを保管・活用し、あわせて各部署に蓄積された非現用文書を受け入れ選別・保存を行う「アーカイブズ」を立ち上げる提案が行われ、新組織を検討するワーキング・グループが答申を法人宛に提出した。しかしこの構想は実現に向かうことなく、大学五十年史編纂室が置かれていた大学史料館も、編纂期間中に収集した資料を院史資料室に移管して以降はアーカイブズの構想に関与することがなくなった。史料館は二〇〇三（平成一五）年に英語表記を「Gakushuin University Archives」から「Gakushuin University Museum of History」に変更し、博物館としての性格を前面に打ち出すようになった。この頃には Archives という用語に組織の文書を保存・公開する機関というニュアンスが定着していたため誤解を避けるための措置であったかもしれないが、いずれにせよ大学五十年史を始めた当初の構想は失敗に終わったのである。

学習院におけるアーカイブズの設立は一旦頓挫した。院史資料室はその後、二〇〇四（平成一六）年と二〇〇七（平成一九）年の二度にわたり校舎改修のために移転を余儀なくされ、総務課職員が一名置かれていたとはいえ、問い合わせ対応などの業務への取り組みは消極的なものとなっていた。筆者は二〇〇三年から学習院大学非常勤講師として自校史授業を担当し、院史資料室には授業準備のため出入りしていたが学内に常駐しておらず、同室の活性化もしくはアーカイブズ設立に向けての行動は何ひとつできなかつた。

四 学習院アーカイブズの開設

しかしながら大学教員の一部は、その後もアーカイブズ設立の意思を継続し、他方で日本アーカイブズ学会の設立（二〇〇四年）や大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻の開設（二〇〇八年）を実現させていった。二〇〇七年一〇月に学習院理事会で承認された『学習院新長期計画』の後半5年間の主要課題と展望」は、主要課題のひとつとして「学習院の歴史と伝統を継承していくための展開」を掲げ、①本院の歴史に関する教職員・学生生徒・父母等の理解の促進と継承、②体系的な記録史料整理、保存システム構築の取り組み、③歴史的施設の保存活用と全院的な体制作りの検討、といった事業計画を発表した。これらの計画を実践するため、二〇〇八（平成二〇）年に「学習院アーカイブズ設立準備委員会作業部会」が発足し、学校法人学習院全体をカバーするアーカイブズ機関のあり方を検討すべく、幼稚園から大学までの七学校と事務組織から作業部会委員が選出された。作業部会は二〇〇九（平成二一）年二月、「過去と未来をつなぐ〈学習院アーカイブズ〉設立に向けて」を答申し、法人の承認を受けて同年四月から学習院アーカイブズ準備室が設置され、筆者は同室の事務嘱託として再び学習院に常駐することとなった。そして二〇一一年（平成二三）年四月から、従来の院史資料室とアーカイブズ準備室とが統合して、学習院長直属の法人事務組織として学習院アーカイブズが正式に発足し、筆者も専任の事務職員に採用された。同年施行された「学習院アーカイブズ規程」第一条には、「学習院アーカイブズは、本院の経営、教育・研究活動及びこれらの活動に伴う事務処理において作成され、收受される史資料のうち、将来に残すべき価値のある史資料を評価選別し、保存・管理する組織として設立する」と目的がうたわれている。学習院という機関で作成ないし受理された記録を保管する「機関（組織）アーカイブズ」という機能が明記され、大学五十年史の開始以来イメ

ーじされていたものがようやく具体化の緒についたのである。

なお菅真城は、「大学アーカイブズは「機関アーカイブズ」を基軸としつつも「収集アーカイブズ」の機能も有する「トータルアーカイブズ」である必要がある：「収集」のみ行うアーカイブズでは、大学アーカイブズではない」と主張している。ここでの「収集アーカイブズ」とは、卒業生・元教員やその遺族、資料保存機関など、個人からの寄贈や学外組織からの収集によって集められる資料を受け入れ保存する場という意味であるが、学習院アーカイブズは「機関アーカイブズ」たることを規程にうたいながらも、「収集アーカイブズ」の機能も色濃く併せ持っている。というのも学校という組織そのものが、その構成員の思い入れ（簡単に言えば学校に対する愛着）を受け止め、その思い入れによって支えられている側面が強いからである。実際に学習院アーカイブズには卒業生や元教職員あるいはその関係者からの問い合わせが多く寄せられ、資料の寄贈やアーカイブ所蔵資料の閲覧利用が行われる。最近寄贈された資料の一例を挙げると、昭和二〇年代の大学学生証や音楽サークルの設立許可書などがある。こうした資料は「機関アーカイブズ」の仕組みの中で収集できる可能性は低い。また個人から寄贈を受けた資料からは、寄贈者が学習院という学校で送った生活に対する愛着を強く感じることが多い。このことは国や自治体・企業のアーカイブズとは異なる、学校アーカイブズならではの特徵ではないだろうか。

五 「機関アーカイブズ」への取り組み

さて「機関アーカイブズ」構築への取り組みであるが、学習院では二〇一三（平成二五）年から各事務部署で「文書ファイル管理簿」の作成を開始した。簡単にいえば各部署で作成した文書ファイルを目録化して、どこに置かれ

ているか及び保存年限などを明示する作業であり、いわば大学五十年史の際に行った原初的なリスト作りを、形式等を整え全事務組織に適用したものと見える。まず二〇一二年度中に作成・使用した文書ファイルの一覧作成を各部署に依頼し、二〇一三年度末には同年度に新たに作成した文書ファイルを追加、さらには過去に作成した文書ファイルも各部署で漸次週及入力を行っている。過去に蓄積された文書ファイルを大量に保管している部署については、学習院アーカイブズのスタッフが直接倉庫に向いて、管理簿の作成を代行する場合もある。その作業は、将来アーカイブズに移管される可能性の高い文書ファイルの予備調査を兼ねたものといえる。二〇一四（平成二六）年には「学習院文書取扱規程」が改正され、「保存期間の満了した文書は原則として学習院アーカイブズに移管する」（第一六条）ことが明記された。文書ファイル管理簿で文書の所在を把握し、非現用の文書は学習院アーカイブズに移管するという、機関アーカイブズとしてのシステムが形式上整いつつある。¹⁰

しかしながら根本的な課題がまだ解決されていない。学習院アーカイブズは各部署から移管された非現用の文書ファイルを受入れ、選別作業を施した後に保存すべき文書ファイルを歴史資料として保存・活用する理屈であるが、肝心の非現用となった文書を受け入れる収蔵スペースが確保されていないのである。スペースの獲得は二〇〇九年にアーカイブズ準備室が活動を開始して以来の懸案だが、まだ事態は動いていない。文書ファイル管理簿の提案自体が、現実を動かして収蔵スペースを得るためのものであったにもかかわらず、スペース確保の目処はまだ立たず、従って学内文書の移管も滞ったままである。各部署から文書移管が円滑に行われるためには、規則の整備もさることながら各部署とアーカイブズとの信頼関係を築いていくことが必須である。しかしながら、事務効率の向上と収蔵スペースの有効活用をうたって文書ファイル管理簿の作成を各部署に負担させ、アーカイブズへの文書移管の仕組みを指し示しながら実際の移管が滞る状態が続けば、その信頼関係が損なわれかねず、筆者は現状に強い危機感

を抱いている。

また、現状で文書ファイル管理簿の作成を実施している範囲は、法人や各学校の事務組織に事務職員が常駐する部署であって、教員のみで構成される組織（たとえば大学の学部・学科研究室など）はその対象となっていない。しかし事務文書の作成・管理に教員があたることは当たり前で、とくに大学の規模の小さな研究室や附置研究所では、任期の限られた副手や非常勤スタッフが文書管理にあたるケースが大半である。そのため適切な文書の管理や引継ぎは、事務職員が常駐する部署よりも困難がとれない、現にそうした研究室からアーカイブズへの相談もしばしば行われる。各学校教員組織の自主性・自立性を尊重しながら、法人部署であるアーカイブズがどこまで適切な文書管理と移管のシステム作りに尽力できるかが、今後大きな課題のひとつである。

アーカイブズの業務で肝要なことは、業務の継続性である。どんなに立派な文書管理のシステムやデータベース、あるいはデジタルアーカイブズを構築したとしても、それが長続きしなければ意味がない。文書ファイル管理簿の作成と更新にしても、一〇年以上継続して各部署の教職員にとって当たり前の習慣になってこそ、その真価が明確になるであろう。

六 各学校での年史編纂・資料整理―事業の拡がり―と深まり―

二〇〇九年に学習院アーカイブズ準備室が設置されて、筆者が事実上アーカイブズの業務を開始してから、組織の事務文書以外のいわゆる歴史資料についても業務の範囲は飛躍的に拡がっていった。それまで扱ってきた資料が院史資料室が所蔵している旧制学習院時代の資料か、もしくは大学・法人の文書程度であったものが、幼稚園から

女子大学までの学校に保管されている文書や歴史資料も扱うべき対象となった。各学校で学内所蔵資料の調査・整理や活用の機運が起こり、アーカイブズに対するニーズが徐々に明確になってきたのである。その先頭を切ったのは女子中・高等科における一二五年史編纂であった。¹⁾

学習院女子中・高等科（通称女子部）は、前述の通り華族女学校開設以来独自の伝統をもつ学校で、法人や大学のある目白キャンパスとは離れた戸山キャンパスにある。二〇〇七年度から『学習院女子中等科女子高等科一二五年史』の編纂が開始され、この事業は編纂と共に、学内外に残されている女子部関係資料の調査・収集・整理を柱としていた。同時期に校舎の大規模な改築が進行していたため、大量の非現用文書や教育教材等が出てくることも想定されていた。筆者は二〇〇八年から一二五年史の編纂委員に加わり、委員の教員とともに資料の調査・整理及びデジタル化と、その成果を踏まえての執筆編集にあたった。女子部にはすでに図書室に女子部の歴史を示す資料を保管する書庫が設けられ、皇室から下賜された記念品、卒業生から寄贈された文書資料や教材・古写真などバラエティに富んだコレクションを所蔵していたが、筆者は大学五十年史を行っていた時期にその存在を全く知らなかった。過去に目録作成も試みられてはいたが、何が収められているかは、きわめてわかりづらい状態であった。さらに二〇一〇年夏、校舎建て替えにともない段ボール約一五〇箱に及ぶ非現用の文書ファイルや写真・図面・教育教材などを解体直前の校舎から運び出し、新たに用意した女子部史料室（といっても小さな空き部屋だが）に移管した。図書室に保管されてきた資料と、倉庫から運び込まれた非現用文書や写真を整理し、その中から『一二五年史』の叙述や写真掲載に使える材料を探していった。そうした一連の作業経験が学習院アーカイブズ設立の土台となったことはいうまでもなく、女子部の教職員の中にも、資料を残し活用しながら将来に継承していくことの意義と有用性に対する理解が少しずつ深まっていった。



写真② 学習院アーカイブズでの女子部授業（2014年11月）

『学習院女子中等科 女子高等科「二五周年史」』は、二〇一一年三月に行われた女子部創立一二五周年記念式典出席者をはじめ、女子部の在校生、女子部卒業生の同窓会である常磐会会員、学習院教職員や学校関係者等に配布された。毎年の女子部新入生に配布されて学校を知るための教材としても利用され、二〇一四年には改訂増刷が行われた。女子部の生徒が社会科授業の一貫で学習院アーカイブズを見学する機会【写真②】が設けられ、原物の資料を前にして目を輝かせる生徒の姿に筆者も教えられるところが多かった。また『一二五周年史』の刊行をきっかけとして、元教職員や常磐会会員からの資料の寄贈・情報提供も増えている。息の長い利用をされる年史を作るためには、基礎作業としての資料の調査・整理が欠かせないことを女子部での経験を通じて改めて実感した。

女子部に続いて学習院幼稚園でも記念誌編纂の企画が立ち上がり、学習院アーカイブズに協力が求められた。編纂作業に先立ち、幼稚園で四〇年余りにわたり行事等

の撮影にあたってはカメラマンから段ボール二〇箱以上に及ぶネガフィルムが寄贈され、二〇〇九年に学習院アーカイブズ準備室に運び込まれた。幼稚園とアーカイブズはそれらのネガの整理とデジタル化を進め、デジタル化の済んだ膨大な写真群のなかから記念誌に掲載する写真を選ぶ作業が行われた。学習院幼稚園は一九六三（昭和三八）年の開園だが、その前に一八九四（明治二七）年に華族女学校幼稚園が設立され、一九四四（昭和一九）年に戦争によって休止されるまでの五〇年の前史がある。そのため学習院では一九六三年の開園を「再開園」と位置づけている。筆者は前史部分の資料収集や執筆を担当し、残存する資料が少なく苦心したが、その前に整理した女子部所蔵資料の中に幼稚園関係の写真や文書が含まれていたため、何とか形にすることができた。^⑤二〇一三年五月、学習院幼稚園再開園50周年記念式典が挙行され、『がくしゅういんようちえん 再開園50周年記念誌』も関係者や園児父母に配布された。

こうした各校の記念誌編纂からアーカイブズへというアプローチは、古く誤っていると評されるかも知れない。京都大学大学図書館の西山伸は「沿革史編纂組織は歴史編纂・研究の主体であるのに対して、大学図書館は一義的に史料の管理・公開を行っていく組織なのである」と述べているが、学習院のような小組織の場合、編纂の企画が立ち上がると最早そのような区別はつけていられないというのが率直な実感である。「記念誌編纂からアーカイブズへ」という書き方をしてしまったが、これは決して「記念誌編纂」の段階から「アーカイブズ」の段階に進化するということではない。少なくとも編纂を終えて編纂室がアーカイブズとなったからといって、学内で編纂のニーズがなくなるわけではないのである。これから明治前期に創立された大学が創立一五〇周年を迎え、一九七〇年代から八〇年代にかけて行われた百年史編纂以来の、大規模な編纂事業が始められる可能性がある。先述したように、大学史編纂と大学アーカイブズはその本質が異なることは否定しないが、大学アーカイブズが大学史編纂の役に立

たなかったとすれば、それこそアーカイブズとしての存在意義を疑わざるを得ない。

おわりに — 「人に優しいアーカイブズ」をめざして —

これまで大学史編纂から学習院アーカイブズの業務にあたって常々感じてきたのは、学校の歴史や資料に対する問い合わせの多さである。現在学習院アーカイブズのホームページは概要を紹介するのみの単純なもので、目録を公開しているわけでもないのだが、設立以来毎年二〇〇件を超える学内外からの問い合わせが寄せられる。今のところ資料の閲覧を申し込むには、事前に電話・FAX・メールなどで連絡するか直接来室するしかないのですが、レファレンス件数が多くなることは当然かもしれないが、学習院の歴史や資料に対するニーズの高さの現れであることは間違いない。目録の整備を進めそれを利用しやすい形で公開することや、デジタルアーカイブズを充実させて所蔵資料へのアクセスを便利にすることが今後の課題であるが、それでも一対一のレファレンス業務の重要性は変わらないはずで、ひいては学習院全体の広報戦略の中に位置づけられるものと考えている。レファレンス業務をこなすこと¹⁴によって、筆者も学習院の歴史や資料に関する多くの知見を得てきた。その知見を資料を通じた様々な活動に還元することによって、学内の各部署間はもちろん、学校と卒業生及び地域社会、あるいは人と人をつなぐアーカイブズであることをめざしている。

国立公文書館元館長の菊池光興は、二〇一二年二月に学習院で行った講演のなかで、学習院アーカイブズに対する要望のひとつとして、「教育という、人間に関わる組織と人々のアーカイブズであることが基本である。生きていく人に、生きている証を示す。『いのち』と付き合い『にんげん』に寄り添う優しいアーカイブズとなることを

心から期待している」と述べた。⁽¹⁵⁾ これまで述べてきたように、学習院アーカイブズの活動はお世辞にも充実した内容とはいえず、多くの問題を解決できない現状にあるが、「人に優しいアーカイブズ」をめざす姿勢は続けていきたい。

註

- (1) 永井英治「大学アーカイブズの公共性と大学アーカイブズの多様性」『アルケイア』八号 二〇一四年。大学アーカイブズを論じた近年の主な著作として、菅真城「大学アーカイブズの世界」(二〇一三年 大阪大学出版会)、平井孝典「公文書管理と情報アクセス—国立大学法人小樽商科大学の「緑丘アーカイブズ」—」(二〇一三年 世界思想社)などがある。私立大学での実践に基づくものでは、鈴木秀幸「大学史および大学史活動の研究」(二〇一〇年 日本経済評論社)がある。『学校法人東海大学 学園史資料センター10年のあゆみ』(二〇一四年)は、私立大学のアーカイブズがどのように成立し、業務を展開していったかを詳細に記録し自己評価を行った例である。筆者が本稿を考える際にも大いに参考とした。
- (2) もちろんアーカイブズの実務担当者が教員身分である私立大学もあるし、身分が職員であっても歴史研究や史資料の取扱いなどに専門性を有する職員もいる。
- (3) 児玉は学習院創立八十五周年(一九六三年)の記念事業の際にも学習院史編纂委員会委員長をつとめ、『学習院の歩み』(一九六三年)の執筆編集にあたった。
- (4) 保坂裕興「学習院大学史料館—歴史資料をあつかう研究施設の役割」『大学時報』一一二号 一九九四年九月。
- (5) 菅前掲書所収「大学アーカイブズの社会的使命」。
- (6) 寺崎昌男「大学アーカイブズ断想—大学史料の価値と公開」岩波講座『日本歴史』月報一一 二〇一四年。
- (7) 筆者の年齢もあるかもしれないが、カード目録にはパソコンで作成したデータベースにはない使い勝手の良さがあり、カード上の情報の大半はパソコン入力を済ませてあるが、レファレンスなどの際にはカードをめくりながら対応することの方が多い。一九九〇年代以降、多くの図書館で検索システムの導入に伴い従来の図書カードの廃棄が進められた。筆者にはカード目録の利便性を顧みない暴挙のように思われる。
- (8) その意味では大学史編纂終了後のアーカイブズ設立失敗の後でも、院史資料室という資料保管場所が存在し担当者がおかれていたことは大きい。それは「編纂の後始末」的な消極的な置かれ方であったにせよ、存続していただけ学習院の場

合はまだ幸運だったといえる。

- (9) なお「永久保存」とされている文書ファイルについても、各部署と相談のうえで必要に応じてアーカイブズが引き取ることを検討している。永久保存とされていないながら日常業務ではほとんど利用される機会のない文書ファイルは、倉庫の中で大きなスペースを占拠している。これをアーカイブズに移すことができれば、各部署の収納スペースの有効利用に大きく貢献することができる。アーカイブズにおける永久保存文書の受け入れについては、富田健司「地方公文書館における複合館の展開―芳賀町総合情報館を事例として」(『記録と史料』二一〇号 二〇一一年三月) 参照。
- (10) 菅前掲書所収「大学アーカイブズの社会的使命」。
- (11) 詳細は延智子(女子中・高等科教諭)による「女子中・高等科史料室の現状と課題」『学習院アーカイブズニューズレター』五号(二〇一五年二月) 参照。
- (12) 拙稿「幼稚園一〇〇年の史資料―『かくしゅういんようちえん再開園50周年記念誌』の刊行によせて―」『学習院アーカイブズニューズレター』二号 二〇一三年二月。
- (13) 西山伸「大学文書館とは何か―沿革史との関係から考える―」『小樽商科大学史紀要』二一 二〇〇八年。
- (14) 大学アーカイブズにおけるレファレンス業務の重要性は筆者も常々感じるところではあるが、まとまった見解を持つには至っていない。全国大学史資料協議会二〇〇二年度全国研究会において慶應義塾福澤諭吉センターの東田正義がレファレンスサービスの重要性を提起したことがあったが、その後の進展は管見の限り不明である。『大学資料をめぐる現状と課題 二〇〇二年度全国研究会報告 於北海道大学』(全国大学史資料協議会研究叢書4 二〇〇三年) 参照。
- (15) 菊池光興「学習院アーカイブズへの期待―役割と課題―」『学習院アーカイブズニューズレター』一号 二〇一二年九月。

Editing of University History and University Archives in the Private School: My Experience in Gakushuin

KUWAO Kotaro

Abstract

This article is my experience engaged in the work of editing University History and managing University Archives. I was an editor of the fifty years history of Gakushuin University, and then became a staff of the Gakushuin School Corporation.

In my experience of compilation of University History, I regarded the business of University Archives as an important body and pursuing the organization of Gakushuin Archives. It is often to say compilation of University History is different from management of University Archives. However I don't realize the necessity to discriminate them.

Gakushuin Archives established in 2011 embodies a function of "Institutional Archives", and manage the duties of filing the volumes of documents which contains business sections of university. On the other hand, it embodies a function of "Collective archives" which contains many materials from some grads and privates. It is a typical character of "Collective archives" of private school which gave opportunity to feel the holder's sentimentalism of memories on their university times.

Gakushuin Archives has two hundred enquiries per year about history or historical materials of Gakushuin. We, the staff of the Gakushuin Archives, listen for such enquiries and seek for the idea of kindness to person through the researcher to access to our archives.